

特集 一 遭難の記録 一

白馬岳西面 名剣尾根^{しょうずだけ} 清水岳遭難

日時:1989年12月22日～1990年1月8日

メンバー:高岸且(CL)、下西勲(SL)、村田洋、近藤久嗣、鶴飼一博、毛利拓郎、佐々木努

概要:黒部側から白馬岳に抜ける厳冬期ルートの内、名剣尾根の記録は、数少なく成功の記録は見られなかった。厳冬期の名剣尾根の踏査に先立って同年11月に同ルートの偵察、デポ設置、南アルプス鋸岳から甲斐駒ヶ岳縦走トレーニングを重ねて挑んだ冬合宿であった。しかし、富山湾から直接吹き上げる湿った暴風雪と平らな尾根の特徴の分析や対策が不十分であり、経験不足による判断の甘さ、行動の遅さなどが原因で清水岳から脱出できなくなった。12月31日に無線による非常信号を発信し、1月8日に7名全員がヘリコプターで救出された。

ここに「清水岳遭難報告書」での塚本会長の総括の一部を再掲する。

「彼らは、一応冬山登山のマニュアルに従って行動したわけだが、欠落していたのは登山者側の動物レベルでの能力であった。体力、知力、技術だけでは冒険という領域での行動は無理である必要なのは3つの和ではなく積としての力と精神力、さらには哲学的バックアップである。端的に言えば、冬山登山とかヒマラヤ登山に必要なものは、強靱な自己管理能力と自分で考え行動する能力である。残念ながらこのあたりのことがマニュアルには書かれていないから、行き詰まると救難信号がいつも簡単に発信されてしまう。要するに教えてもらってできることではない部分に出会うと急に弱さが現れる。」

記録

12月22日

急行「きたぐに」にて離落。近年希にみる見送り、差入れの多さに感謝感激。

列車は、思ったより空いていて座って寝ることができた。

12月23日 晴

宇奈月(7:00/7:50)ー黒薙(9:45/10:30)ー樺平(16:20)

トンネル内は、ほとんどヘッドランプが必要。高いザックは所々ひっかかり歩きにくい。長いトンネルは寝そうになるほど単調である。日が暮れる少し前に樺平に着いた。

12月24日 晴のち雪

樺平(5:45)ー祖母谷温泉(7:40/8:30)ー1400m付近(15:00)

雪が少なく名剣山の南面は、ほとんどブッシュであったため、次の機会に末端からオートルレースすることにし、末端から取り付くのをやめ夏道沿いに登ることとする。祖母谷温泉までの谷のトラバースは、車道に数カ所デブリが出ている程度で問題なく通過する。名剣沢合出付近からとりつき、1000mぐらいから先頭空荷で膝までのラッセルが始まり、湿雪に泣かされる。

12月25日 霧のち晴

1400m付近(7:45)ー1730m付近(15:00)
昼前までガスっていた。ルートファインディング及びラッセルに二人先行して夏道らしきところをトラバースして前進する。所々で小雪崩が起こっているルンゼを越える。晴れていたのので上部に注意しながら通過する。1681mコルの手前のコブでサイト。夜、灯油量が不足していることに気付き、明日より節約することにする。

12月26日 快晴のち雪

1730m付近(7:25)ー不帰岳(13:00)デポ回収

冬山とは思えないほど暑い。平年より6度も気温が高いらしい。膝までのラッセルで稜線伝いに順調に不帰岳に直上する。山頂の積雪は、1m程しかなく、デポ缶をつけた木を6m程登り、幹にフィックスされた斗缶4つとポリタンの灯油5Lを回収する。デポ地(不帰岳)から白馬岳を越えて梅池まで7日の予定であったので不足分の食料と5Lの灯油を回収する。また、この尾根に再度挑戦にくるため残りの食料3日分は残置する。この時点で、下山期限は1月2日となった。昼ごろ1時間ほどシュラフを干すが、まもなく小雪が舞ってきた。夜、灯油コンロの鉛のパッキンが損失していて灯油が漏れていることに気付く。靴クリームの鉛の

特集 一 遭難の記録一

チューブをハサミで細工しパッキンの代用にする。

12月27日 雪

不帰岳 (7:40) - 2310m付近 (13:30)

朝からガスっている。2、3人がルート偵察及びラッセルのため空荷で先行し、随時無線交信をしながらのダブルボッカで前進する。ルートは、赤布を頼りに定めた。昼過ぎに吹雪が激しくなりホワイトアウトとなる。下西の膝が痛みだし、つらそうだった。

12月28日 雪

2350m付近 (11:30) - 清水岳 (15:10)

9時の天気図をとると29日から冬型が強まる様なので、少しのチャンスを活かして出発する。出発時、下西の膝の悪化を懸念し装備の一部を再配分する。途中、何度かホワイトアウトするが、偵察時つけた赤旗とコンパスワーク及び、ダブルボッカで清水岳の三角点に達することができた。

どんどん天候が悪化している。南西からの吹き上げがきつく、視界は20~30mになっていた。正月は日の出が望めるとの予報に喜び、次の日は6日間の連日行動と悪天のため沈殿と決定する。

12月29日 風雪 視界 50m未満

沈殿

沈殿には風が強く雪がふっ飛ばされる清水岳の三角点はテントが埋まる心配はない。しかし、テントをアイゼンバンドなどで補強する。吹き上げる風は、西ないし北西になった。1月2日までの食料を3日まで喰い延ばしをすることにす。夕方、鵜飼が発熱(37.8℃)し、次の日も沈殿に決定した。

12月30日 風雪 視界 30m未満

沈殿

鵜飼は朝9:00には平熱にもどっていたが大事をとって一日沈殿した。日中に3度ほど雪かきにでる。西ないし北西の風。日暮れすぎより一段と風が強くなってきた。夜半から雪、風とも一段と強くなり、夜中に2度雪かきを行う。

12月31日 視界 20m未満

沈殿

予想された通り冬型が一段と強まった。夜中雪かきなどテントを死守するため、ほとんど寝ることができなかった。テントでは、風上側のポールを背中を抑えて座っていたので4人が3、4日後まで首筋の痛みを訴えていた。

朝を迎えるが昼過ぎまで風雪が一瞬たりとも弱まることがなかった。食料、燃料の残り少なさに対して不安はあったが、この時はすでに1月1日の好天に期待する

ほか考えることができなかった。4時の天気図で中部山岳地帯北部では、この後も2、3日冬型が強まり、吹雪が続くということがわかり非常通信をおくることにした。のち1月3日までの食料を1月5日の昼までの第2回目の喰い延ばしを計画した。

16:45 非常通信開始 (145.96MHz)

16:50 早月小屋の水戸勤労者山岳会パーティと交信し、馬場島経由で黒部署に中継される。

17:20 山岳警備隊黒部署と直接に交信する。(天気が回復次第へりによる救助を要請する。食料燃料は節約、明朝7:00に開局、周波数は145.96MHzに固定することを確認する。)

1990年1月1日 風雪 視界 50m未満

沈殿

早朝からラジオ、テレビで我々のことが放送されている。下界では全国的に穏やかな正月を迎えているらしい。16時にへりが偵察に飛ぶが2100mで雲に入り断念し、また地上からの救助隊は、梅池から入山し乗鞍岳の下まで入ったとのことを無線で知る。毛利は、足の裏に痛みを訴えて腫れているので、よく揉むように指示する。夜から風雪が激しくなってきた。

1月2日 風雪 視界 30m未満

沈殿

食事が少ないことよりも、燃料を制限し水作りや調理以外暖がまったくとれないのがつらい。交信は6:00、9:00、10:00、11:00、14:00、15:30。

地上救助隊(梅池隊、清水、高嶋両氏、他2名)は白馬岳の前2850mまで前進し、OB隊(吉田、松浦、加藤)はスキーで白馬大池に向かっていた。

1月3日 風雪 視界 30m未満

沈殿

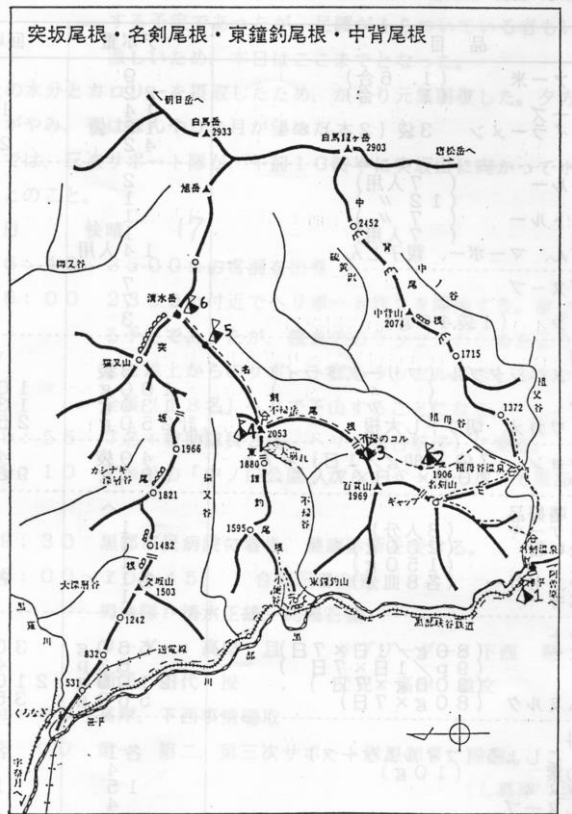
交信は6:00、9:00、11:00、14:00、15:30。昼ごろ視界は一時的に500mまできいたが、すぐに悪化した。食事制限をしているので、雪かきをするとふらふらになった。梅池からの救助隊のうち2人が下山し、さらに、地上救助隊と黒部署との交信が不通になったことを知る。

1月4日 風雪 視界 50m未満

沈殿

6:30、9:00、12:30、14:00、15:30、16:30、17:30の交信。14時頃へりの音が聞こえるが視界が悪く、確認することができなかった。夜になるにつれ風はどんどん弱まっている。明日の午前中に移動高の通過で好天が望めるかもしれない。

特集 一 遭難の記録一



1月5日 風雪
沈殿

下界は晴れているらしい。しかし、清水岳では、ブリザードである。6:30の交信で、「直径20mのヘリポートを作り、四方に目印のザックを置け」との指令がでる。あわてて雪を踏み固める作業をするが、ふらふらである。佐々木が貧血で倒れたが、テント内でコンロをつけて暖をとらずと昼過ぎに回復した。午前中ヘリが飛んでいるが、清水岳(2589m)は依然雲の中で近づけない。

この日から暖をとるため7人全員が1つのテントに集まり寝ることにする。また、夜から各自が持っている非常食を分けて食べることとなった。午後3時半無線交信で、二次救助隊(OB4名含9名)は、ヘリで猫又山(2308m)付近に降り、清水岳へ向かってラッセルで前進していると知る。すぐに高岸、村田は突坂尾根とのジャンクション・ピークまでトレースを付けに行く。

二次救助隊は、2500m付近でサイトしていた。

1月6日 風雪 視界20m未満
沈殿

朝から吹雪が強烈で富山湾側(西側)には顔は向けられない。最後の非常食を、朝から夕方にまわすこととした。1時間毎の雪かきは辛い。

夕方、テントのまわりが吹きだまりとなっているので、テントを移動しようとするが、風が強くてできなかった。この日の唯一の励みは、伊藤先生と柴山さん(左京労山パーティ)が、剣岳で無事が確認されたということだった。夜中、激しい風雪が続いた。夜中の雪かきはもう不可能なので、全員靴をはいたままテントの中で座りビバークをする。

地上からの救出作業は、最悪の天候を想定し突坂尾根よりポーター方式で下山路を作るため、次々とサポート隊をおくりこんでいるらしい。又、清水岳直下にいる二次救助隊は、ホワイトアウトのため停滞した。

1月7日 風雪のち曇り 視界30m未満

9時の交信で、一次救助隊(梅池隊)及び二次救助隊(猫又隊)が清水岳に接近しているとのこと。10時から高岸、下西、村田で梅池隊と合流する。

10:30 テントより約200m東で梅池隊の2名と合流。

10:45 猫又隊の4名と合流し救助隊6名がテントの前に着いた。

12:35 救助隊よりレーションやラーメンなどを頂き、腹に詰め込んだのちテントを撤収し、猫又山方面(突坂尾根)へ下山を開始する。4人用テント、ザイルなどを残置。

13:35 2500m付近に用意された雪洞にはいる。1900m付近まで下山する予定であったが、足腰がふらついている者もいて疲労が激しいため、本日はここまでとなった。

大量の水分とカロリーを摂取したため、かなり元気回復した。夕方にはブリザードがやみ、夜はぼんやりと月が望めた。

地上では、三次サポート隊が、午前10時半に突坂尾根に向かって出発した。

1月8日

6:40 2500mの雪洞を出発

8:00 2300m付近でヘリポート作りを開始する。歩いて下山する予定であったが、腰までのラッセルのためあまり進めず、また地上からのサポート隊もラッセルに苦しんでいるので、全員(18名)ヘリで下山することになる。

8:55 7名と救助隊員3名が、ヘリ(朝日航洋)に乗る。

9:10 宇奈月の「中ノロ公園」からチャーターバスで黒部市民病院へ

9:30 黒部市民病院に着き、健康診断を受ける。

10:00~10:45 合同記者会見

富山県警救助隊：清水正雄

特集 一遭難の記録一

山岳ガイド：高嶋石盛
 京府大山岳部：高岸且、下西勲
 同顧問：田代操
 父兄：高岸敏文

14:00 高岸、下西事情聴取
 17:00 第一、第二、第三次サポート隊黒部署に帰還。

(記/高岸)

山岳ガイド高嶋石盛氏は、1994年、シッキム・ヒマラヤの未踏峰ツイズ峰(7350m)の初登頂に成功した下山途中、消息を絶たれました。ご冥福をお祈りいたします。合掌。



清水岳、剣岳で猛吹雪のため動けなくなっていた京府大山岳部7名、京都左京勤労者山岳会2名、群馬ミヤマ山岳会4名、法政大学山岳部山学会2名の4パーティの合計15名が1月8日にヘリコプター2機によって救助された。(1990年1月8日読売新聞夕刊)

黒部川をゆく冬 閉ざされた雪の谷

④

山頂に近づくと、つれ風雪が猛烈になった。呼吸がろくにできず、目も開けられない。

「山頂まで行けば」

京都府立大山岳部の7人

救助

1週間ビバーク続け

が樺平から清水岳(2600m)にたどり着いたのは89年12月28日。目指す白馬岳はまだ遠い。

リッターを務めた高岸且さん(当時24)は前年、中国の木踏峠に遭征。部員の中には、黒部・丸山東壁から立山への難ルートを冬に登った者もいた。冬の黒部での合宿は初めてだった

が、自信はあった。23日に入山。前半は雪が少なく好天が続く。予定より早く進んだ。しかし、気候は清水岳手前から一変し、風雪が弱まる気配はなくなった。

側から白馬岳を越えるルートを選んだ。地形は夏のバトロールで熟知している。3日で遭難者と合流できるだろう。

しかし、風雪の激しさは予想を上回った。途中で体調を崩した隊員が下山し、宇奈月町の山岳ガイド高橋石盛さん(後にヒマラヤ・ツインズで遭難、故人)と2人になった。

雪は腰まである。5日先が見えず何度もルートを誤った。山頂を勘違いしたヒマラヤ経験者などベテラ

「現場周辺は自分の庭という感覚だったのに、なんぞこんな所が分からんのか」と不思議だった。夏を冬では皆一つとも全然違

「非常、非常。こちら京都府立大山岳部……」

「大学生パーティーが SOSを出した」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」

「黒部川」



日本一の評価

事故のあった89・90年の年末年始、鋸岳と黒部川周辺の山は約10日間の大荒れとなった。4パーティー

15人が県警などのヘリコプターで救助された。多くがヒマラヤ経験者などベテラ

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「涙で、ありがとうございませう。清水さんは言い切りました」

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

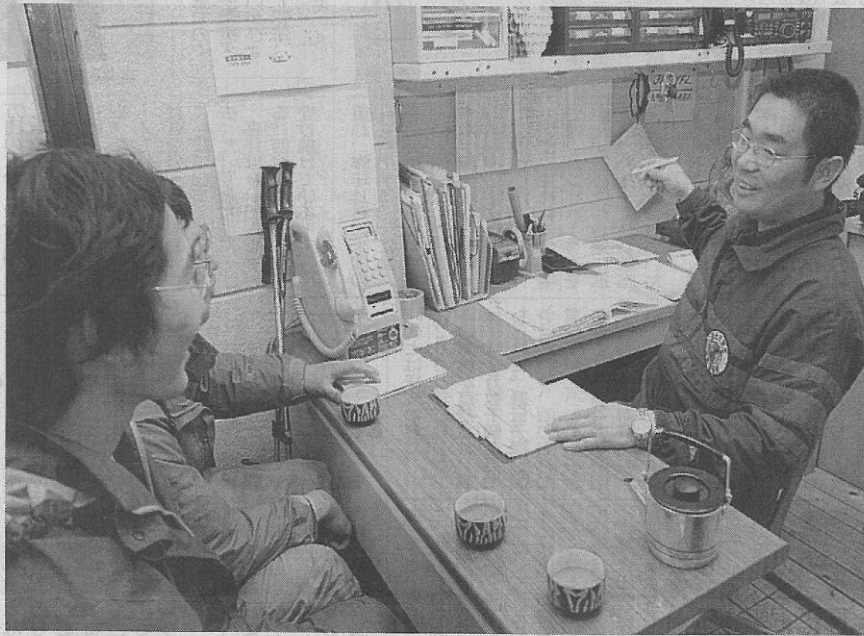
「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。

「あれほどのホワイトアウト(吹雪で視界が極度に悪い状態)は初めてだった。その自信は経験と目。我々は気象の厳しい冬の訓練に裏付けられていた。完る。



昨年の大みそか、鋸岳から下山した登山者を迎える隊員(上市町で)

遭難後15年目の2005年1月に、「黒部川をゆく冬 閉ざされた雪の谷」の特集が企画された。富山県警の冬山遭難救助の中でも90年正月の清水岳遭難が取り上げられた。(2005年1月5日 朝日新聞)